

You&Iでは、前回より特別企画として、地域がん診療連携拠点病院としての当院の役割と取り組みについてシリーズでお送りしています。シリーズ2回目の今回は、「緩和ケア」にスポットを当ててご紹介します。

## I 緩和ケアとは

### 患者さんとご家族の苦しみを和らげるために

最近、特にがん診療の分野で、「緩和ケア」という言葉にふれる機会が多くなっています。「緩和ケア」という言葉は、WHO(世界保健機構)の定義によると、「生命を脅かす疾患に伴う問題に直面する患者と家族に対し、疼痛や身体的、心理社会的、スピリチュアルな問題を早期から正確にアセスメントし解決することにより、苦痛の予防と軽減を図り、生活の質(QOL)を向上させるためのアプローチである。」とされています。

なにやら堅苦しい文章ですが、要は、「いのちに関わる病気で苦しんでいる患者さんとその家族に対して、病気の早い時期から関わりを持って、痛みのみならず、すべての苦しみを和らげるための方法」といった意味合いでとらえられています。

### いつでも、どこでも、より幅広く

緩和ケアというと、その実践場所として、ホスピスや緩和ケア病棟を思い浮かべる人も多いでしょう。また、がんの終末期(最近では終末期という言葉方をすることもあります)にだけ当てはまると考える人もいるかもしれません。

しかし現在ではこのような考え方ではなく、どこでも：自宅、病院などを問わず、いつでも：がんの初期でも、そしてがん以外の病気でも：

認知症や慢性呼吸器疾患なども対象となるという考え方になってきています。



### 疾患についても、より大きな視野で

また、今までの医療では、内科、外科といった大きな区分けから、さらに細分化され(例えば内科がさらに消化器内科、呼吸器内科、循環器内科などに分かれるように)、各々の科の医療者はそれぞれの臓器の疾患のみを診る傾向がありました。いわゆる木を見て森を見ず、病気を診て人を診ずというものですね。これではいけないということで、最近では感染症科や臨床腫瘍科、総合診療科など、より大きな疾患の分類で患者さんを診る科が出てきました。

現在、わが国の緩和ケアは、主としてがんおよびエイズの患者さんのみに適応されていますが、将来は病気の種類に関係なく、医療あるいは人生全体の基本的な考え方になってくるでしょう。



次ページでは、当院での緩和ケアに対する取り組みについてご紹介します。